

Charles BALLY のモダリティ理論 (その 1)

甲斐基文

Some Observations on the Theory of Modality in Charles BALLY : 1

KAI Motofumi

Abstract : The purpose of this study is to reflect upon Charles BALLY's theory of modality and try to make clear what modality is in his theory. As is widely known, and as I would like to show here too, it is extremely difficult to define modality in general. In the field of linguistics, not only in the field of French linguistics but also in the fields of Japanese and English linguistics, all linguists have not yet reached an agreement on the definition of this notion. In this paper, as an introduction, I would like to examine how "modality" or "modalities" are dealt with in three books on grammar or linguistics. This constitutes a preliminary discussion of Bally's definition which is often regarded as a wide one.

要旨 : Charles BALLY のモダリティ理論について考察を加えることが本研究の目的である。モダリティというものは極めてとらえにくい範疇であり、その定義も研究者によって随分と異なる。「広い」概念であると称されることがある BALLY のモダリティ概念について論ずる前段階として、フランス語学の分野において、一般にこの概念がどう捉えられているのかを検証する必要がある。(その 1) では導入編として、いわゆる文法書においてモダリティがどのように取り扱われているかをみた。

1.

まず、次の記述を見てみよう。

ヨーロッパにおける modalité 研究は、アリストテレスに源を発し、中世・近世を通じて発展してきたが、言語学者が modalité に関心を示し始めたのは 20 世紀になってからと言ってさしつかえなからう。フランス言語学における modalité 研究の出発点がバイイ Ch. Bally にあることは誰もが認めるところである。(鳥居：1989, p. 394)

この記述を見ると、フランス言語学においてモダリティ (英：modality, 仏：modalité) 研究を始めたのは、Charles Bally をもって嚆矢とする、と言えそうである。Bally といえば、Ferdinand de Saussure の講義録をまとめた *Cours de linguistique générale* の編者と

してあまりに有名であることは言を俟たないが、Bally 自身の理論の中にも、現代の発話理論の萌芽的論考とみなすことが出来る、重要な指摘が多く見られる。モダリティに関する理論も然りである。

さて、フランス言語学におけるモダリティを広く扱ったものに、LE QUERLER (1996) がある。その中のモダリティの規定の仕方について言及した部分に、次のような記述がある。

En linguistique comme en logique, les théories des modalités vont d'une conception restreinte, inspirée de la théorie aristotélicienne, à une théorie très large, où tout énoncé est modalisé. (Le Querler : 1996, p. 50)

「論理学と同様、言語学においても、モダリティの理論は、アリストテレスの理論に着想を受けた狭い概念から、あらゆる発話がモダリティ化されるといふ非常に広い概念にまで及ぶ。」(以下、引

用部直後にある括弧内の抄訳は筆者によるものである。)

彼女は、言語学において提起されているモダリティの諸定義を、狭い定義 (conceptions étroites), 広い定義 (conceptions larges), そして中庸的定義 (conceptions médianes) の3つに分類し、我々が関心を持っている BALLY の定義を広い定義として位置づけている。

では、何故彼の定義が「広い」と認識されるのか。彼女の判断を無批判に受け入れることは、易きにつく可能性がある。そこで、その判断の真偽を見極めるために、まず、フランス言語学において一般的にモダリティというものがどのように考えられているか検証することが、どうしても必要となってくるであろう。それ故、(その1) では、この点について考察することとしたい。

2.

モダリティとは一体何であろうか。この質問に、過不足なく答えることは至難の技であろう。なぜならば、この概念には本当に様々な定義があり、モダリティというカテゴリーの名の下に、多種多様な言語要素が集められているという現実があるからである。英語においては法助動詞 (modal auxiliary) という文法範疇があり、モダリティの概念がこの範疇と密接に結びついていると言えるということがあるので、英語学の分野においては比較的規定しやすいと考えられるかもしれないが、それでも研究者の間で完全に意見の一致をみている訳ではない。また、日本語学においても、次の記述を参照すれば、同じような状況が見出されることが分かるだろう。

現在のモダリティ研究においては他の言語カテゴリーでは見られないほどに定義に大きなばらつきがあり、モダリティという概念がどのような外延をもっているのか、そしてどういう方法論で研究すべきかについて研究者の意見が一致していないのである。(Narrog: 2002, p. 217)

モダリティという概念は、一言語のみにあてあまるものではないであろうが、以下、ここでは、フランス語学の分野に絞って考えていくことにしたい。

さて、上で引用した LE QUERLER は、モダリティ理論の現状について、次のように述べている。

Les théories des modalités en linguistique constituent une véritable «nébuleuse» pour prendre le terme employé par A. MEUNIER dans un de ses articles. (Le Querler: 1996, p. 49)

「言語学におけるモダリティをめぐる諸理論は、その論文の一つで A. MEUNIER によって用いられている用語を借りるなら、まさに『混沌とした状態』を構成している。」

ここで言及されている A. MEUNIER は、モダリティについて様々な論考を発表しているが、その論文の一つでは、次のように述べている。

Parler de *modalité*, sans plus de précision, c'est s'exposer à de graves malentendus. Le terme est, en effet, saturé d'interprétations qui ressortissent explicitement ou non, selon les linguistes qui l'utilisent, de la logique, de la sémantique, de la psychologie, de la syntaxe, de la pragmatique ou de la théorie de l'énonciation. (Meunier: 1974, p. 8)

「モダリティについて、それ以上の厳密さを伴わずに語ることは、重大な誤解に身をさらすことになる。この用語は、実際、それをを用いる言語学者によって、明示的であろうとそうでなかろうと、論理学、意味論、心理学、統辞論、語用論、発話理論に由来する諸解釈で満ち溢れているのである。」

これは、筆者がモダリティについて考える際に、常に念頭においている記述である。この論考は、発表されてから既に四半世紀以上が経過しているが、現在でも大いに肯綮にあたると思われる。実際、モダリティに関する研究に目を通す場合には、その筆者がどのような立場でモダリティを規定しているか、まず最初に確認する必要があるというのが実情だと言えるほどなのである。

以上のような事情に鑑み、まずフランス言語学において、一般にこのモダリティというものが、特に文法書レベル、言語学辞典レベルでどのように記述されているか、その検証をしてみたい。これは、個々の研究者のモダリティ理論を仔細に検討する前に、「辞書的レベル」でこの概念がどのように理解されているかを見ることによって、Bally の理論がどのあたりに位置づけられるか、その目安が得られると思われるからである。

3.

ここで取り上げるのは以下の書物である。

ARRIVE, Michel, GADET, Françoise et LIMICHE, Michel (1996), *La grammaire d'aujourd'hui*, Paris : Librairie Flammarion.

DUBOIT, Jean et al. (2002), *Dictionnaire linguistique*, Paris : Larousse-Bordas/VUEF.

RIEGEL, Martin, PELLET, Jean-Christophe et RIOUL, René (1994), *Grammaire méthodique du français*, Paris, Presses Universitaires de France.

3. 1. *Grammaire méthodique du français* (pp. 579–583)

ここでは、まずモダリティの概念が、様態論理学から取り入れられたものであることが示され、大枠を次のように定義している。

Dans l'étude de la langue, les modalités sont considérés comme des éléments qui expriment un certain type d'attitude du locuteur par rapport à son énoncé. (p. 579)

「言語研究においては、モダリティは、話者の、自らの発話に対する、ある種の態度を表わす要素と考えられている。」

次に、我々が取り組もうとしている、Bally の考え方が紹介されているが、これに関しては、後述するのここでは触れないこととする。そして、なによりも一番紙幅を割いているのは、発話理論におけるモダリティについてである。

まず、発話理論においてモダリティは、発話行為のモダリティ (les modalités d'énonciation) と発話のモダリティ (les modalités d'énoncé) に大別されるとしている。

Les modalités d'énonciation renvoient au sujet de l'énonciation en marquant l'attitude énonciative de celui-ci qui dans sa relation à son allocutoire. (p. 580)

すなわち、発話行為のモダリティとは、発話行為の主体に言及するもので、対話の相手 (allocutoire) との関係における、発話行為的な態度を表明するものであ

る。現実にはそれは発話文のタイプによって実現され、主に断定 (affirmation) を表す *déclaratif*, 命令を表す *injonctif*, そして疑問を表す *interrogatif* の3つがあるとされる。

それに対して、発話のモダリティは、次のように定義されている。

Les modalités d'énoncé renvoient au sujet de l'énonciation en marquant son attitude vis-à-vis du contenu de l'énoncé. (p. 580)

発話のモダリティは、発話行為の主体に言及するものである点では発話行為のモダリティと同じであるが、こちらは、自分の発話内容に対する話者の態度表明に関わるものである。すなわち、いわゆる *subjectivité* の表明にかかわるものであるというのである。そして、C. Kerbrat-Orecchioni に従い、この *subjectivité* を2つに分け、その各々を *affecitif* (情意的), *évaluatif* (評価的) と呼ぶ。*affecitif* とは、話者の感情のあらゆる表現にかかわるものであり、それに対して *évaluatif* とは、あらゆる評価、判断に相当するものである。そして *évaluatif* は2つに下位分類される。*axiologique* は、良い／悪いという判断に関するものであり、*épistémique* は真／偽／不確実といったような基準に従うものである。つまり、*la vérité, la nécessité, la possibilité* といったような判断基準を元に、自らの発話内容が真であるか偽であるか、必然的であるか否かという基準にしたがって表明される。そして、それらを実現する言語要素の例としては、語彙的要素である名詞、形容詞、動詞、副詞、間投詞、そして他にも動詞の時称、イントネーションなどがあげられている。

以上見てきたように、ここでは、モダリティに関し、バイイの考え方以外に、様態論理的定義と、発話理論の観点からの定義との2つを取り上げられていることになる。

3. 2. *La grammaire d'aujourd'hui* (p. 390)

ここではモダリティを2つに分けて説明している。

まず、厳密に論理的視点から見た場合には、否定を介して同等関係があると言える、必然性 (*nécessité*) と可能性 (*possibilité*) という2つの価値を含むシステムであるという指摘をしている。

Sur le plan strictement logique (logique modale), la modalité est symbolisée par un système comportant

deux valeurs : la *nécessite* et la *possibilité* ; (...).
(p. 390)

そして、拘束的モダリティ (*modalité déontique*) と認識的モダリティ (*modalité épistémique*) の二つを区別するのを良しとし、それによってフランス語における *devoir* と *pouvoir* という動詞の用法も説明可能であるとしている。

次に、文のステータスという観点からモダリティを説明している。

La modalité définit le statut de la phrase, en tenant compte de l'attitude du sujet parlant à l'égard de son énoncé et du destinataire. (p. 390)

発話内容および聴者に対する話者の態度を考慮して、文のステータスを定義付けるものと規定している。そして通常、それらは断定 (*l'assertion*)、疑問 (*l'interrogative*)、感嘆 (*l'exclamation*)、そして命令 (*l'ordre*) の4つを認めている。

前者は論理的な、後者は発話理論的な観点からモダリティを捉えた定義付けであると言えよう。よって、前節で取り上げた *Grammaire méthodique du français* とほぼ同じようにモダリティを取り扱っていると考えることが出来よう。

3.3. *Dictionnaire de linguistique* (pp. 305-306)

最後に、これを取り上げることにしたのは、上で取り上げた2冊に比較して、より多くの考え方が取り上げられているからである。

まず、1番目はよく言われることであるが、*mode* と *modalité* の用語の混同に着目した定義である。

Comme synonyme de *mode*, la modalité définit le statut de la phrase : *assertion*, *ordre* ou *interrogation*. (p. 305)

「モードの同義語として、モダリティは断定、命令、或いは疑問という、文のステータスを決定する。」

つまり、もともと動詞の叙法に関してのみ用いられていた用語である *mode* と *modalité* を同義語とみなしている定義である。

次に、ここでもまた BALLY の見解が紹介されている。先ほどと同様に、これについては後に詳述するこ

とになるので、ここでは触れないこととする。

3番目には、生成文法におけるモダリティについて取り上げている。

En grammaire générative, la *modalité* est, avec le noyau, un constituant immédiat de la phrase de base. Ce constituant de modalité (Mod) représente les éléments obligatoires suivants : Déclaratif, Interrogatif et Impératif, et les éléments facultatifs : Emphase, Négatif (ou Affirmatif), Passif (ou Actif). (...) Il définit donc le statut de la phrase : (...). (p. 306)

「生成文法では、モダリティは核とともに、基底文の直接構成要素である。このモダリティ構成要素は、平叙文、疑問文、命令文という義務的要素と強調文、否定文(肯定文)、受動文(能動文)という任意的要素を表す。(・・・) 故に、文のステータスを決定するものである。」

4番目には A. MARTINET の考え方をあげている。

A. Martinet appelle *modalités* les monèmes grammaticaux qui ne peuvent pas servir à marquer la fonction : le monème de pluriel est une modalité. (p. 306)

「A. Martinet は、機能を示す役目をもたない記号素をモダリティと呼んだ。たとえば、複数を表す記号素は、一つのモダリティである。」

この用語法は、実は一般にマルティネ独自のものであると言われている。

そして最後に、論理的モダリティに対する言及がある。

On appelle *modalités logiques* les diverses manières d'envisager le prédicat de la phrase comme vrai, contingent (ou nécessaire), probable (ou possible). (p. 306)

「文の陳述を真、偶然(或いは必然)、また蓋然的(可能的)と考える様々な考え方を論理的モダリティと呼ぶ。」

そして、この論理的モダリティは *modalisation* とは異なるものと規定しているが、ここではふれないこととする。

前掲の2冊に比べてみると、論理的モダリティを

取り上げている点と、用語および言い方は異なっているけれども、文のステータスを決定するものとしてのモダリティの2つを取り上げている点は同じであると言える。

4.

以上、3冊の書物において、モダリティがどのように記述されているかを概略的に見てきた。それらに共通するのは、論理的モダリティ、そして発話理論におけるモダリティを取り上げているという点である。加えて、そのうち2冊において、BALLYのモダリティ理論について紙幅がさかれているという事実があるということからも、その重要性が十分うかがえる。この検証を元に、次にはBallyの原典にあたり、そのモダリティ理論を詳しく見ていくことになる。

（その1 終わり）

参考文献

- ARRIVE, Michel, GADET, Françoise et GALIMICHE, Michel (1996), *La grammaire d'aujourd'hui*, Paris: Librairie Flammarion.
- BALLY, Charles (1965), *Linguistique générale et linguistique française* (Quatrième édition revue et corrigée), Berne: A. Francke AG Verlag Bern.
- (1942), "Syntaxe de la modalité explicite," *Cahier Ferdinand de Saussure*, 2, pp. 3-13.
- DUBOIT, Jean et al. (2002), *Dictionnaire linguistique*, Paris: Librairie Larousse-Bordas/VUEF.
- DURRER, Sylvie (1998), *La linguistique de Charles Bally*, Lausanne-Paris: Delachaux et Niestlé, S. A.
- KAI, Motofumi (2000), "Etude contrastive des marqueurs de modalité épistémique en français et en japonais," *Mémoire du DEA en Sciences du Langage option Linguistique Française à l'Université de la Sorbonne Nouvelle-Paris III*.
- LE QUERLER, Nicole (1996), *Typologie de modalités*, Caen: Presses Universitaires de Caen.
- MEUNIER, André (1974), "Modalité et communication," *Langue Française*, 21, pp. 8-25.
- (1979), "Points de repères historique pour l'étude de la notion de modalité," *DRLAV*, 23, pp. 17-24.
- (1981), "Grammaire du français et modalités. Matériaux pour l'histoire d'une nébuleuse," *DRLAV*, 25, pp. 119-144.
- (1985), "De l'usage des modaux dans un débat radiophonique," *Langue française*, 65, pp. 103-118.
- Palmer, F. R. (1986), *Mood and Modality*, Cambridge: Cambridge University Press.
- RIEGEL, Martin, PELLET, Jean-Christophe et RIOUL, René (1994), *Grammaire méthodique du français*, Paris, Presses Universitaires de France.
- De SAUSSURE, Ferdinand (1983, 1967), *Cours de linguistique générale*, Paris: Payot.
- NARROG, Heiko (2002), 「意味論的カテゴリーとしてのモダリティ」, 『認識言語学Ⅱ: カテゴリー化』大橋壽夫編, 東大出版, pp. 217-251
- 鳥居正文 (1989), 「modalitéの論理とフランス語」, 『吉沢典男教授追悼論文集』, 吉沢典男追悼論文集編集委員会編, pp. 394-404.